

翻訳と自由：英語の新作能「漂炎」

大東文化大学教授 ジャニーン・バイチマン

世界演劇の中で能は比較的決まりごとが多く、能楽師になるための訓練時間が長いこと
はご承知の通りである。しかし、その訓練時間に学ぶのは決まりごともしくはテクニック
だけでなく、同時にその決まりを通してあらゆる感情を表現できるように努力する。観客
を感動させる能楽師が舞うとき心と型が一体になるとはそのことだと思う。

一方、研究者の立場からいえば、能の決まりには儀式との共通点が多い。特に夢幻能と
通過儀礼（鎮魂祭を含む）との間には驚くほどの共通点がある。しかし、大事な違いもあ
る。通過儀礼の目指すことは、なくなった人の魂が言葉通り他界して、この世に戻らない
ことである。しかし、夢幻能のうち相当数では、主人公のこの世への執着があまりに強く、
絶えずこの世とあの世との間を行き来するからこそ面白い。シテのこの世への帰還は、祭
儀の主体としては不穏当な攻撃的行動であり、その執着感の表現である。いいかえれば、
演劇とは、祭儀のパターンを破って個が突出し、自己表白することであるから、夢幻能の
真の主題はこの自己表白である。シテが人間である夢幻能は、これら両極端——祭儀と演
劇——が相接するところにある。そして、両極の接した瞬間に解き放たれるエネルギーが
印象的である。

上の論は80年代に筆者が発表した「能はどこまで祭儀か」（『文学』第51巻7号1983年7月）
という文章の大意である。80年代は私の能に没頭した時代で、同じ時期につくば万博で初
演され、日本とアメリカで幾度か再演された「Drifting Fires」という英語の新作能も作っ
た。思い返すと、自分の研究でも創作でも、能と芸術的な自由の関係に関心があり、祭儀
と演劇の関係を論じながら、能という形式を別の言語、別の文化に移植しようと思って、
新作能を作ったのだった。これらのことを具体的に述べようと思います。